

気候モデルにおける重要要素に関する 基礎的検討と非専門家への翻訳、 さらにその予測精度の評価に向けた 検討会

2014年5月22日

吉田英生

京都大学 工学研究科 航空宇宙工学専攻
sakura@hideoyoshida.com

メンバー

【主査・幹事】

吉田英生 京都大学工学研究科航空宇宙工学専攻教授

【副主査】

草野完也 名古屋大学太陽地球環境研究所総合解析部門教授

【委員】

江守正多 国立環境研究所地球環境研究センター
気候変動リスク評価研究室長

増田耕一 海洋研究開発機構地球環境変動領域
地球温暖化プログラム 主任研究員

大西 領 海洋研究開発機構横浜研究所地球シミュレータセン
ターマルチスケールモデリング研究グループ研究員

桑原不二郎 静岡大学 大学院機械工学専攻教授

富村寿夫 熊本大学自然科学研究科産業創造工学専攻教授

村田 章 東京農工大学工学府 機械システム工学専攻教授

吉田篤正 大阪府立大学工学研究科機械工学分野 教授

申請書より抜粋(1)

- もともと地球全体で1℃程度という平均温度の増減を過去に遡って確認すること自体が極めて困難な課題であり、IPCCの主論拠は気候モデル (General Circulation Model, GCM)による将来予測に基づいている。
- しかし、熱流体の数値シミュレーションの実際をよく知っている本会会員の視点からは、モデル化に不可避の任意性を直感的にも理解できよう。

申請書より抜粋(2)

- 気候モデルは、太陽からのふく射をエネルギー源として、地球の海洋・大陸・大気中におけるさまざまな熱物質輸送過程をモデル化して総合した極めて複雑な数値シミュレーションコードである。
- 機械系に軸足を置く本会の大部分の会員の研究対象と比較すると、そのスケールと複雑さの相違は著しいが、現象の各要素や素過程はまさに本会会員の専門とするところでもある。
- そこで、気象学者にその検討を全面的に任せるのではなく、本会会員の視点から中立的な第三者としてメスを入れることは極めて重要であると考えられる。

